

「植村隆名誉棄損訴訟」

2015年01月11日

北星学園大学の非常勤講師をしている植村隆氏は、元『朝日新聞』記者で従軍慰安婦問題の報道に関わった。24年前、韓国の従軍慰安婦の方に会いインタビューし、署名入りで2本の記事を書いた。その記事がきっかけで、バッシングを受け続けている。『週刊文春』は2014年2月6日号で「『慰安婦捏造』朝日新聞記者がお嬢様女子大教授」と誹謗中傷する記事を掲載した。東京基督教大学の西岡力氏も「強制連行があったかのような記事を書いており、捏造と言っても過言ではない」というコメントを載せている。現在、植村氏の記事は捏造ではないことが証明されている。

植村氏はジャーナリストとしての社会的評価と信頼を傷つけられ、インターネット上でも人格を否定する攻撃に晒されている。大学には教授の解雇を求めるメールや手紙が送られ続けている。大学は学生の安全のため多額の出費を強いられ、受験生の確保も心配になる。更に、植村氏の家族にまで被害が及んでいる。17歳の娘さんの顔写真がネット上に公開され「自殺するまで追い込むしかない」と書き込まれている。植村氏は自分の立場を言論の力で保護することは不可能であると、人権侵害からの救済を求めるため訴訟を起こした。『週刊文春』と西岡氏に記事の削除と謝罪広告といくばくかの金員を要求している。

参議院会館で9日「植村隆さん名誉棄損訴訟提訴報告集会」が持たれた。私の所には、「目下、30名ほどしか来場者がいないかも」とメールが来たが、実際は300名以上の人々が集まり、当初予定した会場から講堂に変更し、大変な熱気の中で開かれた。本や雑誌で読む学者やジャーナリスト、またテレビで観る政治解説者などが大勢、来ていた。

北星学園大学は脅迫を受け、植村氏の解雇に向かっていたが、支援の輪が広がり、雇用を継続することにした。植村氏の支援は大学を応援しようという激励メール運動から始まって「負けるな北星！の会」が発足した。その後、全国の弁護士たちが大学への脅迫状を威力業務妨害で告発し「北星を守れ」の動きが大きくなうねりに広がっていった。市民の声が起こした運動で、メディアは出遅れた訳である。その申し訳なさが、今回の熱気を生んだのではないか。私は「週刊金曜日」で、この件を知ったが、市民から始まった運動に深い意義を感じる。

報告集会では、植村氏は「私は負けない」と力強く語り、これまでの事情を丁寧に報告された。本人はもとより、家族はどれほど、心を痛めてきただろうかと同情に耐えない。そして、理不尽に痛めつける、名前を出さない脅迫者に怒りを覚える。訴訟弁護団には全国から180名もの弁護士が集まったという。こんな弁護団を擁した裁判があったらどうか。訴訟は植村氏の名誉回復が主眼であるが、家族と大学を守ることでもある。更に、報告集会では「言論の自由と民主主義を守る」闘いであると、スピーカーたちは声を揃えた。

従軍慰安婦を無かったことにし、彼女たちを更に貶める歴史修正主義者は昔からいたが、強かに声を上げるようになった右傾化が、今の日本の状況である。ヘイトスピーチは止むことがない。言論の自由とは権力に対し物言う自由を保障することである。ジャーナリストとジャーナリストが論争することは当然であるが、最近は、権力がジャーナリストを抱き込み、他のジャーナリストを抹殺しようとする傾向がある。朝日新聞バッシングは憲法改定と原発再稼働を目論む安倍政権の指し金であろう。

植村裁判において、彼の自由な講義、家族の安心、大学の落ち着いた教育を勝ち取ることである。そしてジャーナリズムの復権を期待する。裁判を支援して、民主主義が生きていることを証明しなければならない。